

## 小学校5年生への“くすりの飲み方教育（薬育）”に対する評価

○堀内 正子<sup>1</sup>, 足助 麻理<sup>2</sup>, 亀井 淳三<sup>1</sup> (<sup>1</sup>星薬大, <sup>2</sup>品川区立第四日野小学校)

【目的】学校薬剤師と養護教諭の協同で毎年5年生児童に実施している薬育についてその成果を調査するため、5年生の薬育授業前にとったアンケートと6年生になってからとった薬育授業後アンケートを比較し考察したので報告する。

【方法】品川区立第四日野小学校の5年生に、以下の要領で薬育の授業を実施した。①薬の飲み方に関する6題の質問に○×で回答させ、その理由、および感想などを10分程度で記述させた。②薬の飲み方に関し、①の質問に沿って答え合わせをする形で授業を進めた。③薬の飲み方に関する実験をした。④家庭での薬に関するアンケート実施した。⑤その児童が6年生になってから改めて薬の飲み方に関するアンケートを実施した。

【結果・考察】5年生で実施した授業前アンケートと全く同じ問題については、6年生の事後アンケートで正解率が顕著に上昇したが、質問の仕方を変えた類題では、5年生の授業前アンケートと比較して正解率の上昇が低かった。くすりの飲み方実験で体験した内容の問題は、類題でも正解率が高かった。これらより小学校5年生では、授業で習った内容は理解し6年生になっても覚えているが、それを応用することは難しいことが推察されるため、小学校5～6年の薬の服用に関しては周りのサポートが必要であることが考えられた。また児童が実験により体験したことはよく覚えていることが明らかとなったため、薬育の小学生への指導法として、実験を取り入れ体験的に学習することは効果的であると考えた。さらに、児童の記載の中に家庭でも間違った薬の飲み方をしている場合があることが推察され、薬の飲み方の説明は80%以上の児童が母親から受けていることから、薬育は児童だけではなく保護者に向けてもその必要性が考えられた。